

## 虹色のへぼ

野中健一

## 山村からワールドカップ南アフリカ開催を喜ぶ

二〇一二年、サッカーワールドカップ大会が南アフリカ共和国で開催される。ここを研究フィールドとしてきた私にとって、大会が成功することを心から願う。同じようにこの一大イベントに村人が関心をよせるのが岐阜県恵那市串原だ。サッカーと日本の山村との結びつきいえば、二〇〇二年ワールドカップ大会時の大分県旧中津江村の人々とカメルーン・チームとの交流が思い起こされる。そんな村人の思いが、ここにもあるのだ。一山村と遠い国がどうして結びつくのか、意外かも知れないが、そこに地域力の強さを見いだすことができる。

串原では、二〇〇四年一月、南アフリカからゴスペル・クワイヤーの一行が来村しコンサートを催した。村人たちでいっぱいになった山のホールに歌声が響いたときの感動は今も鮮やかによみがえる。実はこの南アフリカと山村のつながりは、私が研究を進めている「昆虫食」がきっかけだった。地域文

虹色のへぼ（野中）

化である「昆虫食」が国際交流にまでつながってきた経緯は、私が調査研究を通じて村人にお世話になってきたことも大きく関わっている。この取り組みから「村の力」をとらえてみたい。

### 「へぼの村」串原

岐阜県恵那市串原は、二〇〇四年に恵那市と合併するまでは、串原村という人口一〇〇〇人足らずの行政村だった。恵那市の中心から愛知県三河地方へと抜ける国道二五七号線を南下し、岩村、明智と盆地の町を抜け、谷間をぬってしばらく進むと、川をわたって山を上る一本道がみえる。この道をたどって急坂を上ると串原の中心地に到達する（図一）。

この村が私が始めて訪ねたのは、一九八六年にさかのぼる。当時、「昆虫食にみられる自然と人間の関わり」と題した卒業論文作成の現地調査のための訪問だった。このあたりは、方言で「へぼ」と呼ばれるクロスズメバチ（はちの子）を盛んに食べるところであり、その様子を調べたかったのだ。

一九九〇年代には、このはちの子食を村おこしとして活用しようと、村人有志が「串原へぼ愛好会」を結成し、クロスズメバチの増殖・保全を目指して熱心に活動し、各地に精力的に足を運んで情報を求めている。昆虫食の研究を続け、当時三重大学に在職していた私も若輩者ながらその活動にお呼びがかかった。ある夜には「会

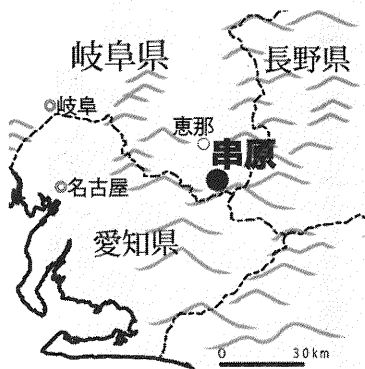


図1 串原の位置



写真1 全国へボの巣コンテストの様子

議に出席してほしいから今から迎えに行くぞ」といきなり村まで車で連れて行かれることもあった。

村おこしの一環として増殖活動体験ツアーやはちの子の新料理の開発も積極的に進めていた。私は新料理を考案する企画に参加した。ところが、考案された新料理はおいしいものの「へボ」の味がしない、そのままでは都会の人に食べてもらわなくてもいいという話になってしまった。では「へボ」の味とは何だろうか？と探り、その経緯をみてみると真に村おこしに大切なことがみえてきた。都会の人を寄せることに目が向きがちになって都市の価値観に迎合しがちになるところだが、村人のアイデンティ

ティーを再確認し、それを誇りとして外に向ける「内的活性化」なしには村おこしはかなわないということである。（野中健一（一九九八）「自然を味わう―ハチの子の味わい方と村おこしの活用―」人文論叢一五、一四一―一五四）。

「全国串原へボの巣コンテスト」はまさに地元「へボ」文化の大イベントである（写真一）。夏から秋にかけて各家で育てたクロスズメバチ巣を持ち寄り、幼虫やさなぎの詰まった重さを競う行事である。毎年百数十の巣が集まり、その出来映えを見にきたり、自宅で料理するためのはちの子の詰まった巣や、はちの子をすり潰してタレとした名物へボ五平餅を買い求める客で、近隣からも多くの人が集まる。二〇〇九年には一六回目

虹色のへボ（野中）

を迎えた。おおぜいの見物人のなかで巣を取り出すので、会場にはハチが乱舞する。その光景だけみれば、危険極まりないと腹を立てるかも知れない。しかし、会場に来る人は刺されることに対して、いたずらに恐れることなく、イベントを楽しんでいる。全国と銘打ち、村人が自分たちの楽しみとこだわりを村人同士ばかりでなく外部の人に向けてもそれを共有し共感を生み出している。これらはまさに内的活性化の証となっている。私は二〇〇五年以降顧問を仰せつかり、活動を応援するとともに地域文化を活かす力を学ばせてもらっている。



写真2 ロブ・トムズ博士との懇談

### 南アフリカと串原の縁

二〇〇四年二月、南アフリカで昆虫と人々との関わりについて共同研究を進めているロブ・トムズ博士を日本へ招聘したおり、へボ飼育の様子を見せてもらおうと、ともに串原を訪問した。へボ愛好会で講演の場が設けられ、トムズ博士は、南アフリカの昆虫食について話をした。その際に、クロスズメバチは南アフリカにも生息していることを言及した。ヨーロッパに生息する種が交易を通じて南アフリカに移入し、しかも現地ではとても巨大な巣を作るので、住民は恐れているのだという。その状況を聞いた参加者たちは「わしらが退治に出かけね

ば」と沸き立った。どうやってはちの子を持ち帰ろうか、大きな巢ならば現地でドラム缶で煮るのがいいのだろうか？生では持ち帰れないのだろうか？と、まだ行かぬうちから、大量の獲物を想像して、へボ料理を食べながら盛り上がった（写真二）。トムズ博士にとってもこの訪問は、印象的なものであった。コミュニケーション活動として住民が熱心に参加し、地域の伝統知識の共有ができていた点で、後日、南アフリカでの在来知識を生かした教育の適応可能性を論じた（TOMS, R and NONAKA, K. 2005. Harvesting of insects in South Africa and Japan - Indigenous Knowledge in the Classroom. *Science in Africa (Online Magazine)* <http://www.scienceinfrica.co.za/2005/july/edibleinsects.htm>）。

### へボと聖歌がつながる

同年四月、私の南アフリカでの在外研究時に知り合った静岡県西尾栄次教諭より、南アフリカ共和国の黒人居住地ソウェトを本拠地とする聖歌隊（ゾラ・セントラル・クワイヤー…以下ゾラと略す）を日本に招聘できることになったと連絡がきた。西尾教諭は、私がトランスバール自然史博物館で研究活動をしていたのと同時期に、ヨハネスブルグ日本人学校在職していた。西尾教諭が学校の遠足行事で、同博物館を訪問してきたことがきっかけで仲良くなった方だ。音楽を専門とする西尾教諭は現地でソウェトの聖歌隊と交流を持ち、日本へ帰国後も「南アフリカの音楽を愛するヨハネスブルグ日本人学校教師の会（MLJ）」を組織し、南アフリカ共和国との草の根の交流を実現させるべく活動を続けていた。おりしも愛知県で二〇〇五年万国博覧会開催にちなみ、（独）日本万国博覧会記念機構の支援を受けて、ゾラの招聘が実現したのだ。

虹色のへボ（野中）

ゾラがコンサートを行っただけでなく、限られた予算で日本の文化に親しみ、交流するにはどうしたらよいか。そのためには、招いてくれるところを探し、経費を極力抑えて滞在できるようにすることが肝要であった。ゾラは現地では全国コンテストでの優勝実績のある実力があっても、日本では無名である。また、アフリカという地は大学生に尋ねても、情報に乏しく、貧困や内戦など必ずしも良いイメージはもたれていないことが多い。しかも合唱隊という多人数を受け入れてくれるところを探すのは難しかった。そこで私の頭に訪問先として「串原」が浮かんだ。音楽とは関係ないかもしれないがクロスズメバチが南アフリカにはいるのだ。へボを食べること＝へボがいる地というつながりで、南アフリカとの交流をはかることを目的とすれば受け入れてもらえるかもしれないと考えたのだ。ずいぶん無理矢理なことではあるが、何はともあれ、さっそく、当時串原村議長を勤めていた三宅明氏（現串原マレットハウス支配人）に相談したところ、なんと検討していただけることになった。総勢一五名の未知の国の人たちを受け入れ、コンサートを開き、交流活動をするなどという企画を実現させるには、村人の理解と協力無くしてはできない。合意を得るまでにさぞかし苦労した事だろう。結果として、串原へボ愛好会が中心となって、南アフリカークしはら交流実行委員会が結成され、受け入れを承諾していただけた。

串原はおりしも一〇月に実施される市町村合併のさなかであった。自治体としては村が消える事や将来の先細りも心配されていた。だが、これを機に、自分たちで独自に企画を立てて、自律的に地球を発展させていこうという気概も高まっていた。不安の中の新たな希望はマンデラ大統領が初の黒人首相として新たな南アフリカを作ったときと重なる。南アフリカ南アフリカの象徴は多民族が融和す

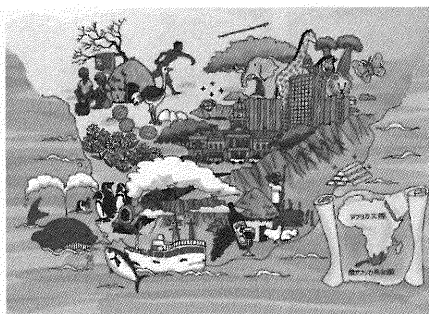


図2 南アフリカのイメージ（柳原望氏デザイン）

間にもスタッフとして加わってもらい、活動を支援した。ヘボ愛好会会員は、体験の手伝いやコンサート会場でのスタッフにと奔走した。メインのコンサートは、協力金方式とし、村人への協力金を含め

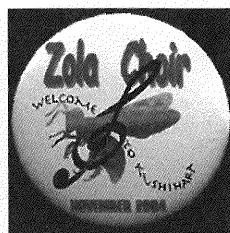


写真3 シンボルとなった虹色のヘボ（柳原望氏デザイン）

る虹だ。クロスズメバチもそんな架け橋になればいいなど、虹色のヘボをシンボルにした（写真三）。また、南アフリカへの理解を深めてもらうよう、南アフリカの豊かな自然と文化を描いた図を描き（図二）、ゾラやスタッフのTシャツデザインとした。こうして歌だけでなく、豊かな文化や自然にも関心を深めてもらうための企画もたてた。

### 村で分かり合う

ゾラ一行は、一月二三日二六日まで三泊四日の行程で村を訪問した。南アフリカークしはら交流実行委員会・MLJ共催とし、恵那市申原振興事務所・恵那市教育委員会・（財）日本万国博覧会記念機構・南アフリカ大使館から後援を得た。主催者側では、西尾教諭をリーダーとして、当時日本ボランティアセンター南アフリカ代表を勤めていた津山直子氏がゾラの引率をし、池口明子氏（現横浜国立大学准教授）および齋藤暖生氏（現東京大学演習林助教）、南アフリカに関心を持っていた漫画家柳原望氏ら私の仕事仲



写真5 村人からソバ打ちを教わる

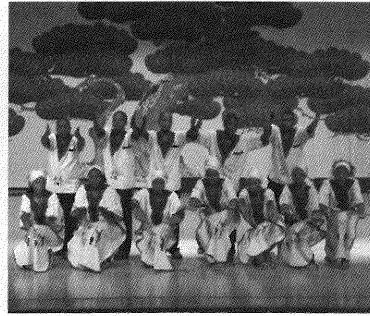


写真4 村のホールでのコンサート

たチケットの頒布および、当日の村外からの客を対象とした募金により収益を得た。これを滞在中の活動資金としたが、村の方々からの有形無形のご厚意もたくさんいただいた。メインのコンサートは平日の夜に開催されたにもかかわらず、村人のみならず周辺からも客が集まり、三〇〇名定員のホールには立ち見も出て大盛況となった(写真四)。力強く迫ってくる歌の数々、伝統的な舞踊や躍動感ある動きに魅了された。

滞在中には、地元の伝統芸能中山太鼓や女性たちのバサラのグループとの交流、そば打ちやこんにやく作りなどの地元文化体験(写真五)、マレットゴルフに温泉のレクレーション、小学校での交流活動(授業参観・小コンサート・南アフリカ文化体験)と充実した行事が企画・実行された。懸案の宿泊に関しては、数名ずつ各家にホームステイしたことにより、家族ぐるみの交流ができた(写真六)。メンバーはさまざまな民族だが英語を話すことができる。いっぽうで英語を話せない村人も多い。だが、そば打ちやこんにやく作りの手ほどき、ゴルフに興じたり、料理を味わい、宴会を楽しむことは言葉の壁を越えて共感できる。自然にコミュニケーションをとることができ、日本式の日





写真7 ヘボ五平餅に舌鼓

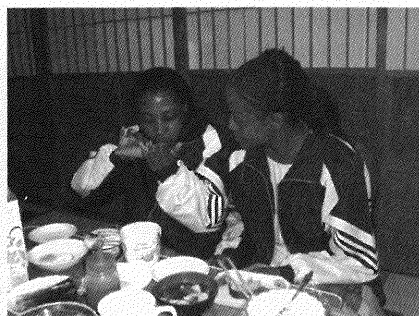


写真6 ホームステイの様子

常の生活や団らんを肌で感じ味わうことができた。

もちろん、行程にはヘボ愛好会の自慢の飼育小屋への案内も組み込まれた。村人は私やトムズ博士の話聞いて、南アフリカの人は昆虫を喜んで食べるのだと思っていたようだ。だが、ゾラのメンバーは都会の住宅地育ちで、干しイモムシを食べる人はいても、まわりで採集するようなことはない。ハチはむしろ恐ろしいものだった。三宅尚巳会長（現名誉会長）は、他の来訪者を待遇するように、嬉々として彼らをクロスズメバチの飼育小屋である「ヘボの家」に案内し、自ら小屋に入り、ハチが飛び交う中嬉々としてハチを捕まえて見せたのだが、彼らには好奇心よりも恐怖感が先立ったようだ。だが、その後数々のパネルを見せながら、ヘボの生態や飼育の工夫を説明する会長の姿にメンバーは次第に関心を持つようになった。会長のあまりの熱心さにその時メンバーのひとりが「会長にとってヘボとは何なのか」と質問した。彼らにとってハチは食べ物ではないから、危険な思いをしてまどうして情熱を傾けるのか、理解しがたいものであったからだ。三

宅さんは「ヘボは私のコレ」と小指を立てた。メンバーは大爆笑しながら、彼らはなるほど納得した。ヘボは「愛人」なのである。それほど「大事な人」「愛している人」という思いの例えが通じたようだった。



写真9 ヘボ愛好会主催交流会での大合唱

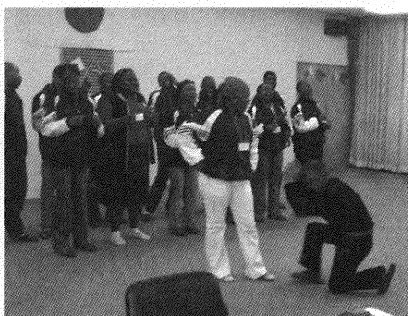


写真8 ヘボ愛好会会長との演劇

はじめはどうしてこんなものに熱心になるのだろうと疑わしい気持ちだったかも知れない。だが、ゴスペル・ソングを歌う者として、そして数々のコンテストに挑んできたメンバーたちは、一つの事に打ち込む姿に共感を覚えるところがあったのであろう。アパルトヘイトの撤廃後もメンバーたちの生活条件は厳しく、仕事を休めばすぐにでも解雇されてしまうことも充分に起こりうる。そんな状況におかれているにもかかわらず、おおぜいの人に歌を伝えたいという夢を日本に託してやってきたのだ。

串原へボの会主催の歓迎会は、村人とゾラメンバーがお互いに大いに盛り上がり、「へぼ五平餅」も覚えたての日本語で「おいしい」を連発して何本もおかわりして食べる者もたくさんいた(写真七)。宴もたけなわになると、コンサートで上演し好評だった、女性に求婚する男の芝居仕立ての曲が再演された。求婚する男役に三宅会長が指名され、見事に演じた(写真八)。そして、ゾラが日本の歌も歌いたいと覚えてきた「もみじ」と「赤とんぼ」の大合唱となった(写真九)。黒人だから、言葉が話せないからと、別世界の人に見るのではない、お客さんとして迎え、村での生活をともにできた。まさに、文化を自

分たちが自ら接して共感し合うコミュニケーションができたのだ。

ゾラは翌年、国際博覧会「愛知万博」の正式招待を受け、南アフリカ代表として、万博会場で上演することができた。こうした名誉を得られたことは兩人も私もたいへんうれしかった。ゾラは、この機に、再び串原への訪問と希望した。ふたたび南アフリカくしはら交流実行委員会が組織され、恵那市串原振興事務所・恵那市教育委員会協賛、南アフリカ大使館の後援を得て再訪が実現した。この時には、コンサートに加えて恵那市長訪問と市庁舎での公演、老人福祉施設や介護施設の訪問と公演でより多くの出合いの場をもち、さらに、アウトレットモールでの買い物も行った。短くも充実した再訪を楽しむことができた。

かつてオーストラリアの昆虫学者が串原を訪れた時、「危険なスズメバチを捕獲する姿を見てさいしょは『アンビリーバブル』だと思ったが、それを凌ぐ熱意や姿勢は『イメージング』だという見方に変わった」と感想を述べた。まさに、この二回の訪問は、ゾラにとっても串原の人々にとっても、そしてそういう機会に立ち会えた私たちにもまさにイメージングにみえた。村人主催の歓迎会で、スピーチを求められた時、私はこの思いを「イメージング・グレイス」にのせ、ゾラのメンバーとともに合唱した。

### 南アフリカで

ゾラの串原再訪の感動は彼らの帰国後のソウエトへも伝えられていた。二〇〇七年二月に、私は、干しイモムシの生産と流通を調べるために南アフリカ共和国を訪問した。そしてソウエト地区での流通を

## 虹色のへボ（野中）

調べるため、今度は私がメンバーの家にホームステイさせてもらった。ゾラのメンバー達が集まり、夜更けまでパーティーが催され歌に踊りにと歓迎してくれた。コミュニティの結婚式にも参加させてもらった。「また串原に行きたい、串原の人たちに会いたい」と串原のことが現地の人々に語り継がれ、「串原は日本でナンバーワン」だといってくれている。

こんどは日本から南アフリカへの訪問を実現させようと、私は当初の目標であった「へボ退治」に向けて、二〇〇八年に現地でクロスズメバチの分布状況を調べてみた。ケープ地方に生息すると報告されていたので、ワイン農場で見つかれば、ワインを飲みながら優雅にハチ追いをしてもらえるかも知れないと美味しい計画もした。しかし残念な事にクロスズメバチの生息を確認することができなかった。おそらく一時は生息したものの定着しなかったのではないかと思われる。だが、クロスズメバチがいなくても串原で南アフリカへの関心は広がった。小さな昆虫に目を向ける人々の関心は、海を越えて大きな世界につながっていく。

深い知識と精緻な技術を築き上げてきたクロスズメバチへボへの熱意は、昆虫そのものへの関心だけでなく、人の前向きな力であり、地域の結集力そのものだと知ることができた。見ず知らずの若造を温かく迎えていただいたことに始まり、調査で学ばせていただき、「ムチャ振り」ともいえるようなお願いも聞き入れていただいた。こういう人の力やそれを実現させる地域の人々の発想の豊かさを、いかにして世に問うていくか、私の課題である。

（本学文学部教授）